第一章　サン・パウロ市近郊

東洋移民の第１回（神奈川丸）で来た熊本県人秋村長寿（ながとし）はグァタパラ耕地に配耕、コロノ契約終了後、熊本、福岡出身者 10 家族は先輩、馬見塚竹造（第２回移民、ジャタイ耕地入福岡県人）の斡旋で土地を探し、サン・パウロ近郊のジュケリー（現在のマイラポラン）に約 50 アルケールの土地を求め、ジャガイモを主とする近郊作物栽培を始める。

1913 年 5 月聖市郊外での植民地の始まりで、ブラガンサ街道近くに所在し、当初は秋村移民地とも云われる。

後年 (1934 年) 付近のタイパス植民地総合計家族数 36 戸、人員 195、男 100、女 95、所有面積 209 アルケーレス、地価 393 コントス、地主 11、籾 200 俵、玉蜀黍 200 俵、馬齢薯 9,750 俵、自動車「貨」 4 台、借地面積 73 アルケーレス、豚 38、馬 44、伯生 70、伯死 24、就学児 25、またこの地区での馬見塚竹蔵、フミ夫妻の所有面積は 70 アルケーレスでピンガ (砂糖きび原料の蒸留酒) 製造を始めており、馬齢薯生産の 500 俵位と同額のピンガ製造 (16 コントス) の収入だった。

片や付近 (コチア植民地) の下元亮太郎氏の場合所有面積 100 アルケーレスで 2800 俵の馬齢薯と蔬菜の収入で (80 コントス) あった。（「在伯日本移植民 25 周年記念鑑」）

なお、この年 (1913 年) はサン・パウロ市内の仕事が思わしくなかった鈴木貞次郎も８名の独身青年を率いて、同じサン・パウロ近郊のパラナイーバ管内でジャガイモと玉ねぎの栽培を試みた。こちらは土地が悪くて成績が上がらず、翌年はコチア地区に移動しているが、日本人による近郊農業の創成期で或る。
（「ブラジル日本移民日系社会史年表」より）